「今、飯塚がもの凄く面白くなっているんですよ！」その言葉には何かを期待させる力強い響きがあった。
世界の入口に飯塚がある。ひと昔前ならば冗談だと言われるかもしれない。しかし、それが現実のものとなりつつある。その鍵を握るのが、株式会社ハウインターナショナルだ。1999年7月、九州工業大学発のベンチャー企業として設立し、今、全国の大学が注目する画期的なシステムを作り上げ急成長を遂げようとしている。代表取締役会長の正田英樹氏にこれまでの活動の経緯と今後の展望について語って頂いた。

正田 英樹
Hideki SHODA
株式会社ハウインターナショナル　代表取締役会長
九州工業大学　客員教授
1972年7月22日　山口県光市生まれ
九州工業大学卒
http://shodahideki.com/
https://www.facebook.com/hideki.shoda

飯塚から全国へ。そして世界へ。

アジアのシリコンバレー e-ZUKA

明治以降「石炭の町」として栄えた飯塚市は、エネルギー革命以降石炭産業が斜陽化し、新しい都市へ生まれ変わろうと模索していた。近畿大学産業理工学部、九州工業大学情報工学部の誘致を進め、新たに「情報産業都市」とスローガンを掲げていたが、産業としては定着していない状況が続いていた。

「初めてアメリカ・シリコンバレーに行った衝撃は、今でも鮮明に覚えています。」

正田氏も、1997年11月に飯塚市が主催したシリコンバレー視察ツアー参加者の一人だった。

シリコンバレー（アメリカ・カリフォルニア州）では、スタンフォード大学を中心とした学生が次々に創業し、そこに大量の出資が入り、優秀な技術者が集まり、プロ経営者が参画し、広いネットワークを持つ営業マンも参画し、世界に展開して行く『生態系』のようなものがあった。起業家、技術者、投資家たちが集うその場所の一番の特徴は、何度失敗しても再び立ち上がれる風土であった。

「重度の脊髄損傷者で首から上しか動かない当時スタンフォード大学の研究者が、『自分がやるからこそ、この研究が世界を変えるんだ』と、誇りを持って言っている姿に感動しました。」

そして、帰国後、「こんな挑戦に溢れたまちを日本の地方都市に作りたい」と志を抱き、創業することとなる。

IT関連の企業を立ち上げると考えるなら、効率や能率をみれば東京や、せめて福岡市内で、というのが専らの意見となるだろう。

「私自身、九州工業大学の卒業生であり、学生時代から商店街の方をはじめたくさんの飯塚の方々に育てて頂きました。お世話になった方への恩返し、それと、飯塚をアジアのシリコンバレーにしたいという熱い気持ちが創業の原点です。ただ、この時はまだ飯塚にはIT関連のことなんかはまだ浸透してない時期で、端から見れば突拍子も無いことでしたでしょうね。ですが、そんな私を支えてくれたのが地元飯塚の方々。ですから、何としてでも飯塚で実現したかったんです。」

2002年に飯塚市は「e-ZUKAトライバレー構想」を打ち出した。これは飯塚市を情報産業都市として整備し、市内の大学や産業支援機関、ベンチャー企業などを活用し、産業の創出と活性化に取り組むというものであった。当初はもの凄い盛り上がりをみせ、ベンチャーブームなどもあって飯塚での起業が相次ぎ、一時は60社を超えるベンチャー企業が創業または誘致されるなど、飯塚市は国からの高い評価も得ることとなった。

正田氏が経営するハウインターナショナルも、飯塚のベンチャー企業群をけん引する一社であった。

「飯塚」が育てたハウ、そして主軸は〝教育〟へ

一時は盛り上がりを見せた「情報産業都市・飯塚」も、その後、水害やリーマンショック等の経済の落ち込みで、チャンスを待つ時期となる。

ハウインターナショナルも大手IT企業への技術提供からの脱却を図り、自社製品・研究開発を繰り返してはいたが、飛躍の糸口が掴めず、深刻な経営危機に陥ったこともあった。そんな中でも続けていたのが、情報産業都市の素地となる技術者の育成を目指した大学生との関わり「インターンシップ」（就業体験）である。学生との繋がりの中で、将来の悩みを聞いたり、また企業家という立場から大学の教職員へのアドバイスをするなど、より関係性を深めていった。それもやはり「アジアのシリコンバレー」を創るという志があったからだ。

そして、今まさにハウインターナショナルは急成長を遂げようとしている。その主軸となっているのが、ハウが開発した『クラウド型大学向け教育ソリューションedi e a（エディア）（※1）』だ。現在、全国28の大学で運用され、また問い合せも相次いでいる。